様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：２３３０２
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2015
課題番号：２４６６０００７

研究課題名（和文）子どもに寄り添うデスエデュケーションの検討

研究課題名（英文）Consideration of the death education to snuggle up to the children

研究代表者
金谷　雅代（東雅代）（KANAYA, Masayo）

石川県立看護大学・看護学部・講師

研究者番号：８０４５７８８７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：子どもへのデスエデュケーションやグリーフケアを実践するための前段階として、保育士、教師、看護師と子どもの親に調査を行った。対象者の約半数が、関わった子どもに死別体験があった。研究者は、死別体験をもつ子どもが集まる「場」を設けて支援するプログラムの実施を検討している。しかし、そのニーズは高くなかった。今後は、グループ支援の意義と支援内容を広める活動を行い、支援の実践につなげていく必要がある。

研究成果の概要（英文）：As a stage before practicing death education and grief care to the children, researcher investigated that the recognition and difficulties to the nursery teacher and teacher and nurse and parents. About half of object replied that the children concerned with had a bereavement experience. Researchers are considering the implementation of the program to help by providing a "place" where children gather with the bereavement experience. However, their needs was not high. We perform activity to tell significance and support content of the group care, and it will be necessary to connect it with practice of the support in future.

研究分野：小児看護学

キーワード：子ども　デスエデュケーション　グリーフケア

１．研究開始当初の背景

研究者が臨床で小児看護に携わっていた時、何度か子どもの死に立ち会ったが、両親にかける言葉は見つかっても、きょうだいへの働きかけには及ばなかったという反省がある。看護師が子どもや家族が病院から去った後の接点について疑問視しているものもある。子どもを亡くした親やきょうだいへのグリーフワークの必要性やケアについても言われるようになったが、本来ケアされるべき子どもへの支援が具体的に示され、浸透しているとは言いがたい。

また、大切な友人を突然亡くした子どもへの説明に苦慮している親の姿も目の当たりにし、直接的に対応する親も、困難を感じていることが考えられる。小学生をもつ親が子どもと「死」について話すことについて調査した結果では、普段の生活の中で「死」について話すことが「あまりない」「ない」と答えた親は 28.7%であり、「子どもにどのように話してよいか分からない」という意見も得ている（茎津他，2009）。

しかしながら、先に発生した大震災で多くの子どもたちが大切な人を亡くした。その様子をメディアを通して体験した子どもたちも否応なく『死』に直面し、大人たちはその対応に迫られているのが現状である。

そう考えたとき、子どもへのデスエデュケーションとグリーフワーク、グリーフケアの必要性がより一層高まるが、これは親だけに任せることなく、社会全体が協力して実践していくことが望まれ、そのためのプログラムが必要になると考えた。

２．研究の目的

本研究では、子どもとどのように『生や死』を語り、伝えることが有効かを検討する。支援プログラムを家庭・教育機関・医療機関が連携して取り組めるシステム作りを目指し、以下のステップで研究を行う。

（１）子どもに関わる職種（保育士、教師、医療者）や親の『子どもへのデスエデュケーション』に対しての関心の程度や実践の現状・困難性と支援に必要な要素を抽出する。

（２）『子どもへのデスエデュケーションとグリーフケア』の方略を検討する。

（３）プログラムの実践と評価を行い、支援内容を精錬・体系化する。

３．研究の方法

子どもに関わる職種（保育士、教師、医療者）や親の『子どもへのデスエデュケーション』に対しての関心の程度や実践の現状・困難性と支援に必要な要素を抽出する、の目的について以下の方法で研究を行った。

（１）調査対象者

I 県内の保育士および幼稚園教諭 162 人、教師（小学校教諭、養護教諭）85 人、病院看護師（小児病棟、がん療養病棟を有する病院）176 人、幼児の保護者 204 人であった。

（２）調査期間：平成 26 年 9 月～11 月

（３）調査方法：無記名による自記式質問紙調査を行った。

調査依頼を各自治体の子育て支援課、学校教育課、病院長（看護部長）に行った。調査用紙は配布の許された施設に直接持参し、説明の上各対象者に配布する。保護者へは保育園の担任を通して配布を依頼した。調査用紙に返信用封筒を同封し、郵送により回収した。

（４）調査内容

①属性

保護者への調査：年齢、性別、子どもの人数と年齢、性別、子どもにとって大切な人を亡くした経験の有無

保育者、教師、看護師への調査：性別、経験年数、大切な人をなくした経験のある子どもへのかかわりの有無

②喪失体験をした子どもの反応やデスエデュケーション・グリーフケアへの認識について問う 6 項目

③デスエデュケーション・グリーフケアにおいて子どもと関わる上での困難性とその内容に関する質問 5 項目

④デスエデュケーション・グリーフケアの必要性について問う 5 項目

⑤デスエデュケーション・グリーフケアにおける担当者や連携に対する認識について問う 2 項目

（５）分析方法

調査結果は、単純集計を行った。統計学的分析は分析ソフトを使用して行った。

自由記述の内容については、得られた回答を質的に分析した。

４．研究成果

（１）対象者の属性

①保護者

n＝80（%）

性別	男性	4（5.0）
	女性	76（95.0）
子どもの人数	1 人	6(7.5)
	2 人	34(42.5)
	3 人	31(38.8)
	4 人	5(6.3)
	5 人	3(3.8)
	6 人	1(1.3)
子どもにとって大切な人（など）の死別（喪失）経験の有無	あり	34(42.5)
	なし	46（57.5）

子どもにとって大切な人（など）との死別（喪失）経験の有無は、子どもに死別経験がないものの方が多かった。

②保育者、教師、看護師

		保育士 n=71	教師 n=60	看護師 n=114
性別	男性	0（0）	22(36.7)	4(3.5)
	女性	71(100)	38(63.3)	110(96.5)
経験年数	～10年	28	24	53
	～20年	24	9	35
	～30年	5	17	18
	～40年	12	10	8
	41年～	1	0	0
	無回答	1	0	0
死別経験のある子どものかかわりの有無	あり	35（49.3）	36（60.0）	52 (45.6)
	なし	36 (50.7)	24（40.0）	62 (54.4)

保育者と看護師では、死別経験のある子どものかかわりの有無について「なし」の方が多く、教師では「あり」が多かった。

（2）子どもが死別経験のある保護者の結果が支援者の結果と異なった点

保護者の結果を保育者、教師、看護師（以後支援者とする）の結果と比較したところ、認識や困難性に特徴的な点があった。

子どもの死別（喪失）経験の有無で比較した場合、子どもの反応について「子どもは死別（喪失）を経験しても思っていることを何も話さない（話さなかった）」の項目で、子どもが死別を経験しているグループでは「否定的意見」が多かったのに対し、死別経験のないグループでは選択が分かれていた。支援者では肯定的意見、つまり、「子どもは思っていることを話さない」と認識している支援者が多かったことから、死別経験のある子どもの保護者と支援者の結果との違いが現れた。

また、対応の困難さについて、子どもが死別を経験しているグループの保護者は、「面会など子どもに立ち会わせる」の項目と「子どもが考えていることを理解しようとする」、「子どもの変化に気づく」の項目で「そう思う＝肯定的意見」群と「そう思わない＝否定的意見」群が同等であり、支援者では困難性の項目すべてにおいて、死別経験のある子どもとのかかわりがある者もないものも、困難と認識している者が多い傾向にあったことから、支援者と保護者に違いが見られた。

（3）支援者の結果

①保育士の結果にみられた特徴

保育士、教師、看護師のいずれでも、死別経験のある子どもへのかかわりの有無にかかわらず、子どもの反応に対する認識、対応の困難性、グリーフケアの必要性についての認識は同様の回答傾向のものが多かった。

その中で、保育士のグリーフケアの必要性に関する意見として、死別経験のある子どもと関わった経験が「ない」保育士が、「専門家に相談する」と「同じ体験をした子どもの集まる『場』を紹介する」の項目で、肯定的意見が多い結果となった。

②教師の結果に見られた特徴

教師の結果として、グリーフケアの必要性を問うた項目のうち、「「死別した対象との思い出を共有する」ことに否定的な意見の割合が他より高くなっていた。

デスエデュケーション・グリーフケアにおいて、子どもへの説明をする人材として医療者やカウンセラーを選択している割合が保護者や他の支援者より高かった。

③看護師の結果に見られた特徴

看護師全体の結果として、デスエデュケーション・グリーフケアにおいて、子どもへの説明をする人材として「自分達」を選択した割合が他の支援者よりやや高い傾向にあり、さらに「協同で」を選択する割合も高かった。

しかし、子どもを支える人材として「自分達」を選択した割合が他の支援者に比べて低く、医療従事者が死別経験をした子どもに関われる場所や時間の限界を反映していると考えられた。「協同で」を選択する割合が高いことから、親や家族等に任せるという認識だけではないことも伺えた。

（4）子どもの反応についての認識に関して

大切な人の『死』を自分のせいだと感じる子どもが多い、怒りを表出するといった、死別を経験した子どもの反応として見られると言われていることを質問項目にあげたが、本研究では、保護者でも、支援者でもこの捉え方は異なっていた。看護師で「ややそう思う」の回答が高めだったが、全体として否定的意見が多かった。

（5）グリーフケアの必要性に関する認識

保護者においては「専門家に相談する」ことと「同じ体験をした子どもの集まる『場』に出かける」の項目であまり必要とされていないと考えられる回答傾向にあり、支援者でも「同じ体験をした子どもの集まる『場』を紹介する」の項目は「分からない」の回答と否定的意見の方が多かった。死別経験のある子どもとのかかわりの有無で保育士に違いが見られたものの、全体としては必要性を高く認識されていないことが判明したことは、今後の活動を考える上で重要である。

（6）今後の展望に関して

研究代表者は、グリーフケア実践のモデルとして、米国 The Dougy Center で学んだ。ここでは、volcano play room（怒りを発散させる部屋）があり、死別を経験した子どもが、スタッフの見守りのもと、精一杯怒り（思い）をぶつけている姿も見てきたため、自分がグリーフケアプログラムを実践する際にも、この部屋の意義を活かしたいという思いがあ

った。しかし、調査結果では、怒りを表出する（した）の設問には否定的意見が多かったことから、死別を経験した子どもに見られる可能性のある反応としての「怒り」について、知ってもらう機会を作ることも必要と考える。

さらに、米国 The Dougy Center での研修で、実践されているプログラムを見学し、同じ経験をしている仲間との交流があり、感情を自由に表現してよい、安心できる場所があることの意義を体感してきたので、このようなグリーフケアを広く紹介をしながら実践につなげていく。実践にあたっては、保育士や教師、医療従事者、心理士等協働して、子どもとその家族も支えていける体制作りとプログラム構築を行っていく必要がある。

＜引用文献＞

①茎津智子、小林千代、井上由紀子他、小学生を持つ親が子どもと「死」について話すことの意識と実態、天使大学紀要、9 巻、2009、81－92

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１件）

①金谷　雅代、西村　真実子、子どもへのグリーフケアに関する親の認識と実践の現状と困難性、石川看護雑誌、査読有、13 巻、2016 年、75－84、
https://ipnu.repo.nii.ac.jp/index.php

６．研究組織

(1)研究代表者

金谷　雅代（KANAYA, Masayo）
石川県立看護大学・看護学部・講師
研究者番号：８０４５７８８７

(2)研究分担者

西村　真実子（NISHIMURA, Mamiko）
石川県立看護大学・看護学部・教授
研究者番号：５０１３５０９２